

鹿踊りのはじまり

宮澤賢治

青空文庫

そのとき西のぎらぎらのちぢれた雲のあひだから、夕陽は赤くなゝめに苔の野原に注ぎ、すすきはみんな白い火のやうにゆれて光りました。わたくしが疲れてそこに睡りますと、ざあざあ吹いてゐた風が、だんだん人のことばにきこえ、やがてそれは、いま北上の方や、野原に行はれてゐた鹿踊りの、ほんたうの精神を語りました。

そこらがまだまるつきり、丈高い草や黒い林のままだつたとき、嘉十はおちいさんたちと北上川の東から移つてきて、小さな畑を開いて、粟や稗をつくつてゐました。

あるとき嘉十は、栗の木から落ちて、少し左の膝を悪くしました。そんなときみんなはいつでも、西の山の中の湯の湧くところへ行つて、小屋をかけて泊つて療すのでした。

天気の良い日に、嘉十も出かけて行きました。糧と味噌と鍋とをしようつて、もう銀いろの穂を出したすすきの野原をすこしびつこをひきながら、ゆつくりゆつくり歩いて行つたのです。

いくつもの小流れや石原を越えて、山脈のかたちも大きくはつきりなり、山の木も一本一本、すぎこけのやうに見わけられるところまで来たときは、太陽はもうよほど西に外れて、十本ばかりの青いはんのきの木立の上に、少し青ざめてぎらぎら光つ

てかかりました。

嘉十は芝草の上に、せなかの荷物をどつかりおろして、栃と粟とのだんごを出して喰べはじめました。すすきは幾むらも幾むらも、はては野原いつぱいのやうに、まつ白に光つて波をたてました。嘉十はだんごをたべながら、すすきの中から黒くまつすぐに立つてゐる、はんのきの幹をじつにりつぱだとおもひました。

ところがあんまり一生けん命あるいたあとは、どうもなんだかお腹がいつぱいのやうな気がするのです。そこで嘉十も、おしまひに栃の団子をとちの実のくらゐ残しました。「こいづば鹿さ呉でやべか。それ、鹿、来て喰」と嘉十はひとりごとのやうに言つて、それをうめばちさうの白い花の下に置きました。それから荷物をまたしよつて、ゆつくりゆつくり歩きだしました。

ところが少し行つたとき、嘉十はさつきのやすんだところに、手拭を忘れて来たのに気がつきましたので、急いでまた引つ返しました。あのはんのきの黒い木立がぢき近くに

見えてゐて、そこまで戻るぐらゐ、なんの事でもないやうでした。

けれども嘉十はびたりとたちどまつてしまひました。

それはたしかに鹿のけはひがしたのです。

鹿が少くても五六疋、湿つぽいはなづらをずうつと延ばして、しづかに歩いてゐるらしいのでした。

嘉十はすすきに触れないやうに気を付けながら、爪立てをして、そつと苔を踏んでそつちの方へ行きました。

たしかに鹿はさつきの柵の団子にやつてきたのでした。

「はあ、鹿等あ、すぐに来たもな。」と嘉十は咽喉の中で、笑ひながらつぶやきました。そしてからだをかがめて、そりそりと、そつちに近よつて行きました。

一むらのすすきの陰から、嘉十はちよつと顔をだして、びつくりしてまたひつ込めました。六疋ばかりの鹿が、さつきの芝原を、ぐるぐるぐる環になつて廻つてゐるのでした。嘉十はすすきの隙間から、息をこらしてのぞきました。

太陽が、ちやうど一本のはんのきの頂にかかつてゐましたので、その梢はあやしく青くひかり、まるで鹿の群を見おろしてぢつと立つてゐる青いきもののやうにおもはれました。すすきの穂も、一本づつ銀いろにかがやき、鹿の毛並がことにその日はりつぱでした。

嘉十はよろこんで、そつと片膝をついてそれに見とれました。

鹿は大きな環をつくつて、ぐるくるぐるくる廻つてゐましたが、よく見るとどの鹿も環のまんなかの方に気がとられてゐるやうでした。その証拠には、頭も耳も眼もみんなそつちへ向いて、おまけにたびたび、いかにも引っぱられるやうに、よろよろと二足三足、環からはなれてそつちへ寄つて行きさうにするのでした。

もちろん、その環のまんなかには、さつきの嘉十の柝の団子がひとかけ置いてあつたのでしたが、鹿どものしきりに気にかけてゐるのは決して団子ではなくて、そのとなりの草の上にくの字になつて落ちてゐる、嘉十の白い手拭らしいのでした。嘉十は痛い足をそつと手で曲げて、苔の上にきちんと座りました。

鹿のめぐりはだんだんゆるやかになり、みんなは交る交る、前肢を一本環の中の方へ出して、今にもかけ出して行きさうにしては、びつくりしたやうにまた引つ込めて、とつとつとつとつしづかに走るのでした。その足音は気もちよく野原の黒土の底の方までひびきました。それから鹿どもはまはるのをやめてみんな手拭のこちらの方に来て立ちました。

嘉十にはかに耳がきいんと鳴りました。そしてがたがたふるえました。鹿どもの風によれる草穂のやうな気もちが、波になつて伝はつて来たのでした。

嘉十はほんたうにじぶんの耳を疑ひました。それは鹿のことばがきこえてきたからです。

「ぢや、おれ行つて見で来べが。」

「うんにや、危ないじや。も少し見でべ。」

こんなことばもきこえました。

「何時だかの狐みだいに口発破などき罹つてあ、つまらないもな、高で栃の団子などだよ。」

「そだそだ、全ぐだ。」

こんなことばも聞きました。

「生ぎものだかも知れないじやい。」

「うん。生ぎものらしどごもあるな。」

こんなことばも聞えました。そのうちにたうたう一疋が、いかにも決心したらしく、せなかをまつすぐにして環からはなれて、まんなかの方に進み出しました。

みんなは停つてそれを見てゐます。

進んで行つた鹿は、首をあらんかぎり延ばし、四本の脚を引きしめ引きしめそろりそろりと手拭に近づいて行きましたが、俄かにひどく飛びあがつて、一目散に遁げ戻つて

きました。廻りの五疋も一ぺんにぱつと四方へちらけやうとしましたが、はじめの鹿が、
ぴたりととまりましたのでやつと安心して、のそのそ戻つてその鹿の前に集まりました。
「なぢよだた。なにだた、あの白い長いやづあ。」

「縦に皺の寄つたもんだけあな。」

「そだら生きものだないがべ、やつぱり蕈などだが。毒蕈だべ。」

「うんにや。きのごだない。やつぱり生きものらし。」

「さうが。生きもので皺うんと寄つてらば、年老子だな。」

「うん年老りの番兵だ。ううはははは。」

「ふふふ青白の番兵だ。」

「ううははは、青じろ番兵だ。」

「こんどおれ行つて見べが。」

「行つてみる、大丈夫だ。」

「喰つつかないが。」

「うんにや、大丈夫だ。」

そこでまた一疋が、そろりそろりと進んで行きました。五疋はこちらで、ことりことりと

あたまを振つてそれを見てゐました。

進んで行つた一疋は、たびたびもうこわくて、たまらないといふやうに、四本の脚を集めてせなかを円くしたりそつとまたのぼしたりして、そろりそろりと進みました。

そしてたうたう手拭のひと足こつちまで行つて、あらんかぎり首を延ばしてふんふん鼻いでゐましたが、俄かにはねあがつて遁げてきました。みんなもびくつとして一ぺんに遁げださうとしましたが、その一ぴきがびたりと停まりましたのでやつと安心して五つの頭をその一つの頭に集めました。

「なぢよだた、なして逃げで来た。」

「噛ぢるべとしたやうだたもさ。」

「ぜんたいなにだけあ。」

「わがらないな。とにかく白どそれから青ど、両方のぶぢだ。」

「匂あなぢよだ、匂あ。」

「柳の葉みだいな匂だな。」

「はでな、息吐でるが、息。」

「さあ、そでば、氣付けないがた。」

「こんどあ、おれあ行つて見べが。」

「行つてみる。」

三番目の鹿がまたそろりそろりと進みました。そのときちよつと風が吹いて手拭がちらつと動きましたので、その進んで行つた鹿はびつくりして立ちどまつてしまひ、こつちのみんなもびくつとしました。けれども鹿はやつとまた氣を落ちつけたらしく、またそろりそろりと進んで、たうたう手拭まで鼻さきを延ばした。

こつちでは五疋がみんなことりことりとお互にうなづき合つて居りました。そのとき俄かに進んで行つた鹿が竿立ちになつて躍りあがつて遁げてきました。

「何して遁げできた。」

「氣味悪くなてよ。」

「息吐でるが。」

「さあ、息の音あ為ないがけあな。口も無いやうだけあな。」

「あだまあるが。」

「あだまもゆぐわがらないがつたな。」

「そだらこんだおれ行つて見べが。」

四番目の鹿が出て行きました。これもやつぱりびくびくものです。それでもすつかり手拭の前まで行つて、いかにも思ひ切つたらしく、ちよつと鼻を手拭に押しつけて、それから急いで引つ込めて、一目さんに歸つてきました。

「おう、柔つけもんだぞ。」

「泥のやうにが。」

「うんにや。」

「草のやうにが。」

「うんにや。」

「ごまざいの毛のやうにが。」

「うん、あれよりあ、もう少し硬ばしな。」

「なにだべ。」

「とにかぐ生ぎもんだ。」

「やつぱりさうだが。」

「うん、汗臭いも。」

「おれも一廻行つてみべが。」

五番目の鹿がまたそろりそろりと進んで行きました。この鹿はよほどおどけもののやうでした。手拭の上にすっかり頭をさげて、それからいかにも不審だといふやうに、頭をかくつと動かしましたので、こつちの五足がはねあがつて笑ひました。

向ふの一足はそこで得意になつて、舌を出して手拭を一つべろりと管めましたが、にはかに怖くなつたとみえて、大きく口をあけて舌をぶらさげて、まるで風のやうに飛んで歸つてきました。みんなもひどく愕ろきました。

「ぢや、ぢや、噛ぢらへだが、痛ぐしたが。」

「プルルルルル。」

「舌拔がれだが。」

「プルルルルル。」

「なにした、なにした。なにした。ぢや。」

「ふう、あゝ、舌縮まつてしまつたよ。」

「なじよな味だた。」

「味無いがたな。」

「生ぎもんだべが。」

「なじよだが判^{わか}らない。こんどあ汝^{うな}あ行^いつてみる。」

「お。」

おしまひの一^{びき}疋^ふがまたそろそろ出^でて行^いきました。みんながおもしろさうに、ことごと頭^{あたま}を振^ふつて見^みてゐますと、進^{すす}んで行^いつた一^{びき}疋^ふは、しばらく首^{くび}をきげて手^て拭^{ぬぐ}を嗅^かいでゐましたが、もう心^{しんぱい}配^{はい}もなにもないといふ風^{ふう}で、いきなりそれをくわいて戻^{もど}つてきました。そこで鹿^{しか}はみなびよんぴよん跳^とびあがりました。

「おう、うまい、うまい、そいづさい取^とつてしめば、あどは何^{なん}つても怖^おつかなぐない。」

「きつともて、こいづあ大きな蝸^{なめくづら}牛^ひの早^{はや}からびだのだな。」

「さあ、いゝが、おれ歌^{うた}うだうはなんてみんな廻^まれ。」

その鹿^{しか}はみんなのなかにはいつてうたひだし、みんなはぐるぐるぐる手^て拭^{ぬぐ}をまはりはじめました。

「のはらのまん中^{なか}のめつけもの

すつこんすつこの析^{とち}だんご

析^{とち}のだんごは結構^{けつこう}だが

となりにいからだふんながす

あを
青じろ番兵は

き
気にかがる。

あお
青じろ番兵は

ふんにやふにや

ほ
吠えるもさないば

な
泣ぐもさない

や
瘡せで長くて

ぶぢぶぢで

くち
どこが口だが

あだまだが

ひでりあがりの

なめぐちら。」

はし
走りながら廻りながら踊りながら、

鹿はたびたび風のかぜのやうに進んで、手拭を角でつい

たり足であしふんだりました。嘉十の手拭はかあいさうに泥がどろついてところどころ穴さへ

あきました。

そこで鹿のめぐりはだんだんゆるやかになりました。

「おう、こんだ団子お食ばかりだちよ。」

「おう、煮だ団子だちよ。」

「おう、まん円けちよ。」

「おう、はんぐはぐ。」

「おう、すつこんすつこ。」

「おう、けつこ。」

鹿はそれからみんなばらばらになつて、四方から柵のだんごを囲んで集まりました。

そしていちばんはじめに手拭に進んだ鹿から、一口づつ団子をたべました。六疋めの鹿は、やつと豆粒のくらゐをたべただけです。

鹿はそれからまた環になつて、ぐるぐるぐるぐるめぐりあるきました。

嘉十はもうあんまりよく鹿を見ましたので、じぶんまでが鹿のやうな気がして、いまにもとび出さうとしましたが、じぶんの大きな手がすぐ眼にはいりましたので、やつぱりだめだとおもひながらまた息をこらしました。

太陽はこのとき、ちやうどはんのきの梢の中ほどにかかつて、少し黄いろにかゞやいて居りました。鹿のめぐりはまただんだんゆるやかになつて、たがひにせわしくうなづき合ひ、やがて一列に太陽に向いて、それを拝むやうにしてまつすぐに立つたのでした。嘉十はもうほんたうに夢のやうにそれに見とれてゐたのです。

一ばん右はじにたつた鹿が細い声でうたひました。

「はんの木」

みどりみぢんの葉の向さ

ぢやらんぢやらんの

「お日さん懸がる。」

その水晶の笛のやうな声に、嘉十は目をつぶつてふるえあがりました。右から二ばん目の鹿が、俄かにとびあがつて、それからからだを波のやうにうねらせながら、みんなの間を縫つてはせまはり、たびたび太陽の方にあたまをさげました。それからじぶんのところに戻るやびたりととまつてうたひました。

「お日さんを

せながさしよへば、はんの木も

くだけで光る

鉄のかんがみ。」

はあと嘉十もこつちでその立派な太陽とはんのきを拝みました。右から三ばん目の鹿は首をせはしくあげたり下げたりしてうたひました。

「お日さんは

はんの木の向き、降りでも

すすぎ、ぎんがぎが

まぶしまんぶし。」

ほんたうにすすきはみんな、まつ白^{しろ}な火^ひのやうに燃^もえたのです。

「ぎんがぎがの

すすぎの中^{なか}さ立^たちあがる

はんの木^ぎのすねの

長^なんがい、かげぼうし。」

五^{ばんめ}番目の鹿^{しか}がひくく首^{くび}を垂^たれて、もうつぶやくやうにうたひだしてゐました。

「ぎんがぎがの

すすぎの底^{そこ}の日暮^{ひぐ}れかだ

苔^{こけ}の野^のはらを

蟻^{あり}こも行^いがず。」

このとき鹿^{しか}はみな首^{くび}を垂^たれてゐましたが、六^{ばんめ}番目^めがにはかに首^{くび}をりんとあげてうたひま
した。

「ぎんがぎがの

すすぎの底^{そこ}でそつこりと

咲ぐうめばちの

愛どしおえどし。」

鹿はそれからみんな、みぢかく笛のやうに鳴いてはねあがり、はげしくはげしくまはり
ました。

北から冷たい風が来て、ひゆうと鳴り、はんの木はほんたうに碎けた鉄の鏡のやうにかゞ
やき、かちんかちんと葉と葉がすれあつて音をたてたやうにさへおもはれ、すすきの穂ま
でが鹿にまぢつて一しよにぐるぐるめぐつてゐるやうに見えました。

嘉十はもうまつたくじぶんと鹿とのちがひを忘れて、

「ホウ、やれ、やれい。」と叫びながらすすきのかげから飛び出しました。

鹿はおどろいて一度に竿のやうに立ちあがり、それからはやてに吹かれた木の葉のやう
に、からだを斜めにして逃げ出しました。銀のすすきの波をわけ、かゞやく夕陽の流れを
みだしてはるかにはるかに遁げて行き、そのとほつたあとのすすきは静かな湖の水脈のや
うにいつまでもぎらぎら光つて居りました。

そこで嘉十はちよつとにが笑ひをしながら、泥のついて穴のあいた手拭をひろつてじ
ぶんもまた西の方へ歩きはじめたのです。

それから、さうさう、
苔^{こけ}の野原^{のほら}の夕陽^{ゆふひ}の中^{なか}で、
わたくしはこのはなしをすきとほつた秋^{あき}
の風^{かぜ}から聞^きいたのです。

青空文庫情報

底本：「校本宮澤賢治全集 第十一卷」筑摩書房

1974（昭和49）年9月15日初版発行

1976（昭和51）年6月15日初版第2刷発行

※底本で、「鹿踊《しゝおどり》りの」となっていたところは、「鹿踊《しゝおど》りの」に改めました。

※旧仮名遣いの表記は、混在も含めて底本通りにしました。

入力：O B a K e

校正：渡瀬淳志

2003年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鹿踊りのはじまり

宮澤賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>